

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 栗田知宏

本論文は、イギリスの「エイジアン音楽」というジャンルが、それを生産・流通・消費する人々の相互作用によっていかに維持されているかを、業界関係者へのインタビューや参与観察によって活写し、エイジアン・カテゴリーが生成するプロセスを文化の社会学の観点から分析した労作である。

序章・第1章では、文化のグローバル化／ローカル化という背景のもと、エイジアン音楽がエスニック・アイデンティティを生み出す場となっていることが指摘される。次いでピエール・ブルデューの「場」、ゲイリー・ベッカーの「界」、南田勝也の「指標」などの社会学的概念や音楽産業論、エスニックビジネス論の視点を踏まえた分析視角が提示される。

第2章では、エイジアン音楽の成立経緯と、パンジャービーがその「代表」とみなされている現状が確認される。同時にパンジャービー以外の言語や演奏スタイルを含めた「エイジアン音楽」という包括的なカテゴリー境界が、音楽場における伝統的指標、アンダーグラウンド指標、エスニシティ指標の作動を伴いながら維持されるメカニズムを明らかにするという問いが設定される。

第3～5章では、筆者が2010～12年にロンドンとバーミンガムで行なった、エイジアン音楽関係者26名へのインタビューと参与観察、有名音楽家の既発表インタビューなどをもとに分析がなされる。このなかで、(1)バングラーとボリウッド音楽が伝統的象徴として真正性を獲得していること、(2)ダンス・ミュージック、打ち込みなどアンダーグラウンド指標に属する技法を用いるAUやデーシー・ビーツ／アーバン・デーシーが、自らを新しいエイジアンとして肯定的に意味づけなおしていること、(3)全米進出したJay Seanなど非エイジアン音楽を演じるエイジアン・アーティストによる自己イメージの管理、(4)非パンジャービーの歌手やDJが自らのエスニシティを社会関係資本として利用する業界参入戦略、(5)南アジア系音楽フェスティバル・メーカーにおける人々の実践などが、豊富な資料をもとに論じられている。

これらの分析を通して終章では、音楽産業とメディアを介した場の代表性をめぐる象徴闘争が生じていること、エイジアン音楽産業がエスニック・アイデンティティを備給する装置となっていること、エスニシティが個人化する一方でエイジアン性が選択的・戦略的に構築されること、など重要な知見が得られている。

審査では、音楽という言語障壁のないジャンルであるがゆえに、グローバルでトランスナショナルな文化消費と、アイデンティティ政治の資源としてのエスニシティの複雑な交渉が生じるプロセスを豊かに記述しうることが説得的に示されているとして、高い評価を得た。エイジアン音楽の産業規模、受容形態などの文化経済学的分析を今後充実させる必要はあるが、本論文では栗田氏の音楽消費経験、ヒンディー語を学んだバックグラウンド、イギリスでの1年間に及ぶ参与観察が生かされており、今後、文化社会学やエスニック・アイデンティティ研究に大きな示唆を与えることに疑いはない。よって当審査会は、本論文が博士(社会学)の学位授与に値するという結論に達した。